

夜日事務コバに委首長と招待まニツモエッセンの程よく
アルネーリヤ

五月二十九日(土)雨

対高商戦の擲り行ふ

サッカー、排球、卓球、優勝も、野球、卓球

は惜敗シ、花園からド頭、恨が深い

この日余の金庫番に残存す、浅倉と共に会計の

整理を行ふ、午前中、午名に巨り、大消費の未解決

後、遠征軍のモヤシ、既勝と手傳ふ

一日、茶のまアバット、三使の先持は英のあり

噫、専ら校寮生活にも現実、波波はしくと押寄

せて来たなる、現実あり、動かぬ事実は

俺達はこの事実を卒直に認めながら、それよりいそ

東越えくゆえとある、馬鹿ものふも知小あ

或るは、それと自ら知つておから、天邪鬼にも得息に

おそ、おのれも知小あ、旧利高校寮生活、悲劇

が、その新未度にあ、一層、熱湯をく

にす、おのれ、の、おらうか

本日、家より送金あり、存性より謝り

恒々に聖書研習、二部送る、自ま、おあり

五月三十日(日)雨、昨日の高商戦は、野球は五―三

で敗北、五種目中三種目、判、朝す

家より、おのれ、到着す、感激、包、解く

矢張り東京のキザは美味なり、手踊りが遠く

午後、北海道新演劇人協会発表の、墮胎医

観にゆく、一応、感激す、道辯のマクセントが、おあり

演技、装置は、おあり、原佐、菊田一夫は佳作

である、東京で、バラ座が、おあり、好評、相、引

である、四時、向、おあり、長篇、巨、引

つて、観客、おあり、性病、予防、運動、の、一、演、出、者

ので、おあり、性病、予防、運動、の、一、演、出、者

が、おあり、性病、予防、運動、の、一、演、出、者

が、おあり、性病、予防、運動、の、一、演、出、者

薄削の如く思へる。

然し、俺の心から出る道も「医」^者の如く思へる。二と三と四と五と六と七と八と九と十と

考へさせられる。眞の正義感に燃え、善良は生かす按て

は出来たかへのかうか？ 謂はれど、如く、博愛に連る

「医」は仁術ありと謂はれど、如く、博愛に連る

匠者としての生む方は斯くも至難ぶのであろうか

次は二の主人の若き産婦人科匠。身辺に起る

蹉跌、その小の彼が追ひ上ユーマエの土台、障害の

しそ中とをみる。善良に生むことの苦難

仁道に生む人は、邪道に生むる苦難

この彼ありのヒューマニズムの追求は、術の聖者としての

見方は、最も的ふ（彼が出征中、宿地で手術中

感梁生、梅毒の（あ）人生の終焉が来るのを

多幸するや、や二の人生の伴侶は去り、最後

に許さぬか、医者も、医者としての生む方、自分

善良なるまじ方が、果し何れも、社会に於て認め

られるものあり。

夜の床に伏し、おまじきものを再び再読す

六月一日（火）夜十時、舟を池田に白小

舟不覚り、快通不敷の道、人々をあふ

同行奉還班相乗、即ち本部、晚餐会用

トシカツの油力取りあり

正に驚異的、おまじきの中、おまじき

十勝の平野に、悠大ぶ気と美食の人

六月五日（土）四日夜帰、舟中

今日の朝、少事務を改善に努め、

相当、植木を持込を、舟内随一の好客用気

と張り出す、おまじき

十名、松屋氏等。上井氏の紹介あり。

淋一まよ!!

この水が束ねえりか。この記念祭から如何に吾らか。

立派に扱切のこぎ出まか?.....

記念祭のう腹く。冷静に自己の生活に切替えるこぎ

出まか。その切替へ。微妙!!

意!! 夢よ! 現定よ!

記念祭は終りぬ。月終りぬ。

雨の降る。降りにく。降りしる雨よ

一昨年の昨年の訪小で。勇水令の新芝丹フンク

文子とやん。又まよ。細望ん。ミヤラふら。雨の中

別水ミの三度。年をふりつ。雨の中。帰りに文子とやん

記念祭のせんを縁で。二年の三度。然も記念祭の時の

今小文子とやん。今年最後の。永遠に。記念祭の

消えてしまふ。か。文子とやん。東曲祭の記念祭の

この遠まかい思を出。永遠に。水水を。導小給

ミヤラふら。ミヤラふら。ミヤラふら。ミヤラふら

奥に良し。文子とやん。念を。諸兄よ。威那の。ゆふ

水水の。首材で。よ。水程。ミヤラふら。ミヤラふら

偉大。アル。ミヤラふら。ミヤラふら。ミヤラふら

中四。回。記念祭。永。遠。に。ミヤラふら。胸中。甜小難

思。出。ま。か。あ。何。支。障。あ。り。あ。る。春。の

性。怒。見。よ。事。美。誰。の。事。美。の。否。や。す。ま。ら。ぬ

淋一まよ。米。切。う。直。ま。理。村。と。留。村。の。持。主。の。ま。よ

諸兄。頭。張。う。ミヤラふら

ミヤラふら

ミヤラふら

ミヤラふら

六月十八日(金)

記念祭終了後口正に札幌祭リあり。

札幌至リハニー。あつちと市内ナカリ散歩。

愈々河畔・サカス見学。夜の夜店見学のも又良し。

十五日には(註)で倒のお茶やのあきんの会小。話するの

口にお茶を何おや都合お茶あつち。相手を嫌気がさす。

らふも。安心し歩く。④の屋上は市街を眺望す。

ふ。水あり。中島公園を散歩す。池畔の石に腰下

傍のフタバ。草むらり。彼才偶然四ツ葉を捜す。よし

一本を捕進至る。彼才。東京辨を南に居る。

彼才自身も気づかずとの事不毛。全然地味である。

懐しの事やと。思ふ出ず。

恒子の手やと。思ふ出ず。

お茶やのあきんの会。こらや又お茶あきんの会と

後には。十六日の浅倉の知人の校向の定一巻上

す。夕飯を馳五の事。Kinnb達。無踏を見る。

ニ小又。久おりに家へ帰る。気分は悪く。近郊のKinnb達

が果てしなく。噂の思ふ出ず。親切な方達あり。

悲し。断り。始末の事。夕飯時に止り込んで。遅くまで

寝る。あつち。自校時代。お茶あきんの会。お茶あきんの会。

残り。白崎の会。別小をふとふと。

十七日。深沢。藤原の外あり。即ち。カ一東京にあり

カレの親映。一心成敗あり。天話。フランス映画の

良し。水あり。薄理の事。お茶あきんの会。

と會小。又。毎の買。藤原の分。下宿。お茶あきんの会。

へ原の会。PM十一。家人。お茶あきんの会。お茶あきんの会。

首の会。會つ。美味あり。フタク。お茶あきんの会。

日十三。中野。毎。お茶あきんの会。お茶あきんの会。

記念祭の。お茶あきんの会。お茶あきんの会。

は晴らし。実に快適に飲ん。お茶あきんの会。

美味かつ。お茶あきんの会。お茶あきんの会。

堀江。藤原。浅倉。お茶あきんの会。

大分ぶつかつきまうらうが、おあさん、おとさん

今日の物理実験

物理実験の出席

実験のみの実入に集まる。何故か、全多の計器も類做強の理そのりです。世に嫌いのやま

三つ、いりり、天下

夜、晴る、委員会、南道、在の、空、一、可、波、り

行事予定

二期、委員会、二、月、日、

六月二十日、相島、湯、説

二十日、聖、奉、り

二十三日、予、自、今、試

七月五日、十日、一、期、執、験

七月二十日、二十三日、按、業、者

八月十日、八月下旬、夏、季、休、暇

八月下旬、(一)、二、事、務、引、継、ぎ

一、首、次、の、後、委、員、会、の、件、目、委、員、長、に、任、命、さ、す

一、按、據、P、T、A、按、據、及、本、委、員、会、と、親、合、せ、こ、し、の、

二十六日(土)、実、施、さ、す

何、れ、も、若、う、向、の、按、據、者、一、山、に、お、け、る、大、清、教、の、
按、據、の、進、め、に、按、據、の、出、て、来、る、一、山、に、お、け、る、大、清、教、の、
出、し、に、お、け、る、若、う、向、の、按、據、者、一、山、に、お、け、る、大、清、教、の、
出、し、に、お、け、る、若、う、向、の、按、據、者、一、山、に、お、け、る、大、清、教、の、

一以上一

冥結の記

斯くも一誌を了すも
春今や此の満喫の時
咲く花舞の息

移る易き春の日を

身をやと夏辺の心

今こそ我らの全情熱を
こら代わりの大身知り
踏み投さす

嗚呼 果して若き日を

いかに若くす

高きものに

一七〇の 五月十日

小宮一平

北海道帝國大學惠迪系
第百參次定期委員會

會計部長

細野順三



總理大臣 鈴木幸禮 (民主愛統義下院議員)

外務大臣 深澤利行 (自由黨委員下院議員)

内務大臣 今西洋洋 (自由黨總裁下院議員)

農林大臣 江口昭平 (民主黨顧問下院議員)

大藏大臣 細野順三 (キリスト民主黨總裁下院議員)

文部大臣 淺倉悟 (キリスト民主黨委員上院議員)

商工大臣 山家貫之 (民主黨員上院議員)

運輸大臣 伊藤益義 (自由黨下院議員 北海道知事)

逓信大臣 寺分元一 (無所属 前運輸大臣 東京府知事)

厚生大臣 今西暢夫 (キリスト民主黨書記長 上院議員)

司法大臣 榊原敬 (民主黨上院議長)

無任所大臣 竹内五男 (無所属 東大教授)

無任所大臣 稻垣昌利 (自由黨下院議員 前山梨縣知事)

内閣書記官長 西田恒久 (民主黨 下院議員)

警視總監 板谷定 (無所属)

相垣以遠三入閣

四・三 泉 成立す

鈴木内閣 小親任式

官房長官 西田恒久 警視總監 板谷定

民主 四 自由 四 キリスト民主 三

組閣 工作 三日間

Herbsttag

J. Horono

Der Herbsttag ist da! Es gibt viele Sinnlichkeit. Ich kann mir die Jugend lebhaft vorstellen. Auf dem Gipfel des Berges wo wir als Schulknaben stets unseres Herbsttag Fenar angezündet hatten. hielt ich an und wendete mich um. Da droben war man hoch über dem Stächen und konnte in die Ferne sehen. Ich seichelte mir mit der Hoffnung. Es ist ausgezeichnet gut. Der Herbsttag ist die Welt des Schönen, denn ich habe geliebt Herbsttag Fenar. Es ist schöne Gefühl in ~~der~~ Leben! Als ich kam Gegenstand, dieser Ort erinnert mich stets an meine Kindheit. Ich selber war an dens geworden.

Es ist Wahrheit! Ich bin schmerz aber ich lieben dich!

— das ende —

40
3
2
1
1
1
1

sem

北海道帝國大學醫學部

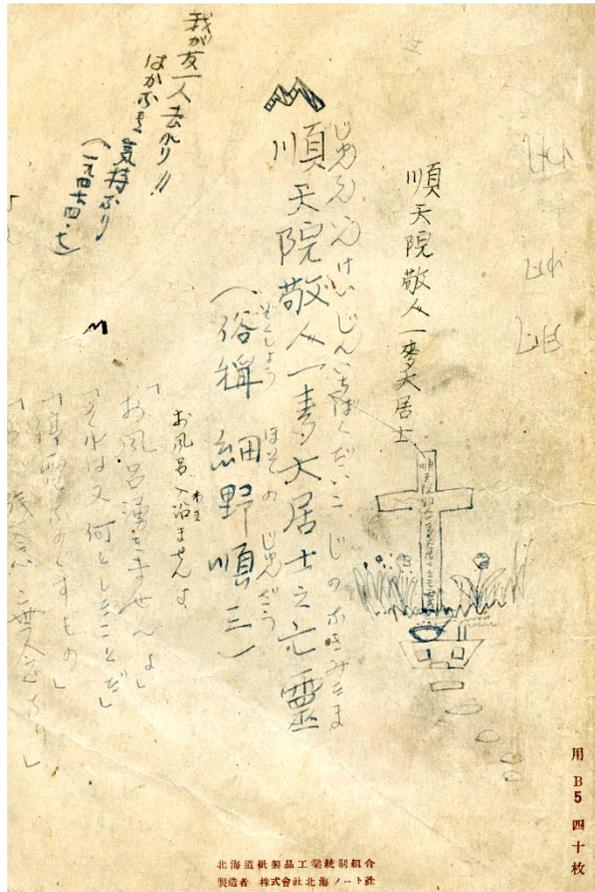
小兒學科志望

總理大臣 鈴木美種
外務大臣 加藤和夫
內務大臣

ハ札幌農學校日工ゾが島

夢淡々東京





自一九四九・四・九
至一九四九

眞実一路の旅
ふ川は

眞実鈴子
思ひ出
白秋

その日その日

来る日、
過ぎる日、
呼吸
之

母

此の日記を

最愛の婉子に捧ぐ

北大医学部

札幌にて 順三 謹す

序に替えて

勉強するために津軽の海を超えて
愛する君の元と離れしをそよ末をが

どうして こんふに 落着かふいのぞらう

どうして こんふに 苦しいのぞらう

婉子よ 僕の現在のこの奴力が

無駄でないことは知ってるね

お前が僕から離れ難いのは

天張りこの奴力が多事と

僕は知ってる

そしてこの一頁一頁一行一字が

その選んだ記録ひあることを

婉子よ 愛する婉子よ!!

川原三記

一九四九・四・九

※四月十一日(月)晴

婉子宛書簡投函する。

解剖学講義あり、人間をけつり対象として、医

者としての専門教育を受けること。何かが淋しい。

のモエのせいのか知らうか。過去の教育から最後のこの

コースにいざ入るが、人間ととり弱さをみせつけぬ

を構ふ気がする。午名 福田とんを訪れる。

下宿の件再び御依頼。早く快適不処ぬ

見つかれば良い。落着きまい。そとく勉強しな

然し如何し。僕も弱いのから。高校生活のマネ

リから逃れ得ない。人間は老る。草不。

この弱さを。一歩進んで。一人で立上る。日か来ない

ものか。まだ。個の自覚不足のせい

孤独。えし。憐れ。事と。女に限る。人のあげ足

ばかり取る。妥協し。おぼろげ。はい。知らうか

あかしく。肉。二人。うすく。この社会の中

に近づき。自分。たまたま。淋しい。思ふ

夜は篠原の下宿で。眠る。感情の内観が

天張り。この物産と。取巻。火。出。様。起す

おぼろげ。見るのは。かえ。者。何。今。限つて

四月十二日(火)晴

寝覚めの悪さは。何。今。限つて

事。おぼろげ。激しい。意欲が。減退。おぼろげ。はい

知らうか。特に。寒中。一二月。横決。に。アルバイト。通

つて。おぼろげ。思。出。おぼろげ。一つの。目的。に向

進んで。おぼろげ。体。自身。良。動。おぼろげ

す。この。頃。は。学。業。と。京。モ。た。村。意。欲。が

衰。おぼろげ。折。角。新。鮮。不。元。分。に

おぼろげ。迎。こ。新。学。期。おぼろげ。ア。ト。お。お。い

こ。お。い。う。あ。い。限。り。本。解剖

四月十七日(日) 復活節

The first day of the week cometh Mary Magdalene early, when it was yet dark, unto the sepulchre, and seeth the stone taken away from the sepulchre. Then she runneth, and cometh to Simon Peter, and to the other disciple, whom Jesus loved, and saith unto them, They have taken away the Lord out of sepulchre, and we know not where they have laid him. — (St. John chap 20 / 1-2) —

マгдаラのマリヤが約二千年前に主イエス・キリストの復活を見たのは、実にその墓石が取除かれた。あつて事のつぎ始まつた。あの重たい墓石をイエスキリストは自ら取除して復活を給ふた。現代の我々は、この永遠の生命を得るの神の国実現のため、重たい墓石を取除かねばならぬ。この事は、基督教徒の永遠の使命であらう。聖日の朝、北スウェーデンで野球をや、香川館内下宿人の東西対抗ふり、五割の打率の魂強水じ、大Aー四で惜敗す。午名、寮つゆえ、ラガオを南まつ、午睡す。入浴の後、会計部の状況と聴く。寮の会計の困難を語り、金の回転のテクニックに就いて感想を述べる。こんな事は、関係こそないけれど、同じく会計委員と経験ももつて、その感想の二つと語り、激励するの無意味とはおもひ、夜は嬪子一書信、こゝろある。感情と理解の板挟みと戒め、理はあり、こゝろを割る事の不可成をも書く。又、高校生活の意義、思ひ出を語り、文化の家建設の重且大なる使命を例、傲慢

まい(書き)つてに次の下名の中坪氏の事ふと書(早)
 けのより又授業ふり 早い 琴似(一)落着く(一)し
 生易い 勉強では到底 医者にはふ川(一)い。 余程(一)しつかり
 しぶいと 駄目(一)ぞ。 それには満足とは(一)ぬが。 良き 環境(一)が
 ありぞ。 通学には少し不便(一)か。 静寂(一)も亦(一)め(一)ゆ(一)か(一)つ。
~~Peter~~ Peter therefore went forth, and that other disciple,
 and came to the sepulchre.

So they ran back together, and the other disciple did
 outrun Peter, and came first to the sepulchre.

And he stopping down, and looking in, saw the linen
 clothes lying; yet went he not in.

Then cometh Simon Peter following him, and went
 into the sepulchre, and with the linen clothes lie.

And the napkin, that ~~was~~ ^{was} about his head, not
 lying with the linen clothes, but wrapped together
 in a place by it self.

Then went in also that other disciple, which came
 first to the sepulchre, and he saw, and believed.

For as yet they knew not the scripture, that he
 must rise again from the dead.

Then the disciples went away again unto their
 own home. (St John 20 of chapter 11-15)

四月二十一日(木)曇 西風強し。 此処一週向 寒し 西風が吹き捲り
 原町田のカラシ風を思はせ。 札幌特有。馬糞風をまう。 長し 積雪
 期に 道路に雪と氷に積った。馬糞が 雪の 溶解と氷に乾燥(一)
 きの 季節 風が吹き 飛はる(一)る(一)の(一)ま(一)う(一)だ。 又 冬(一)龍(一)リ(一)の(一)ス(一)ト(一)フ(一)の
 煤(一)や 石(一)炭(一)が(一)ラ(一)カ(一)氷(一)に(一)飛(一)ぶ(一)も。 その 不衛生(一)の(一)事(一)も(一)甚(一)か(一)い(一)

旧帝大は名実共に充実し設備も教授陣も備へて入學すべき
その一つに諸君は最善教育を受けざるも、過去十三年乃至
十四年の教育の終止所不承也。諸君の在は是れ大いと思ふ
我々当局者の意を介し人格學問共に優れを指導者として
社会に奉仕するもの、勲勞を欲しい

終る。北大のスクールカラーの一である。宣誓書に於て

総長もさうを通り、北大に於ては保証人制度は採らぬといふ
個人の人格と尊重を、學生自身の宣誓書署名を以て
それには替る好のなき、クローク先生に連ふ。紳士としての学校側
の取扱を待し、自主的行動をとり責任を負ふ。

医学部会議室に署名する、一、三九分對て帰る。

四月も下旬の雨寒の事甚し、夏鬱あり。

子供達と歌と唄とをり、と騒ぐ。社後一〇。三〇。

四月二十二日(土)晴、雨上りの道に歌へ、とと登校す。

解剖、生理講義あり、見玉教授休講にて豊田助教授

代講、猫モデルで午骨をやる、午名十二時半放課

沙羊寮に至り、前夜帰札の浅倉と馳へ、東都の

温暖を以て快適なる環境を備へ、羨望の地とし

ピンポンに興ず、恵迪寮会計部長山田茂志大君来る

記念祭に就いて諮問する、予算、組の方、社と相談と

受け、要は、舍生大の決議に依るが、委員会の予算

の組の方即ち委員会の記念祭執行可否の動向が凡そ

決まると考ふる旨伝へる、思ひ起せば、月を傾注しと張

つて前年のことを走馬燈の如く往來す、浙外委員と

して資料購入の爲、日夜駆け廻る、夢、如く過ご

三月の努力の跡、華々しい成果を収り、終末して

六月十三日の記念祭前後の思ひ出を、白線生活最後

のフアイトと捧げ盡し、と言ふも過ぎた日はい

傍へかぶりつゝ演藝放送に耳を傾ける。果して日曜日の宵ぶらん 明日から一週向みろりしほら水子のである。

斯うして 細果郷で人情にすべり、もがいてなと、時折り、

故郷の事、婉子の事が、思ひ出される。日曜日の午名は

よく婉子と、鶴川の山を歩いたころを、一番はじめの日の事、

あの場処で、婉子は向口と一と心境を許へる。又、あの日

には、婉子に愛するここの苦しさも、さる白しろ、二人が結ばれ

そのも、あの場処である。嗚!! 婉子よ、健在ぶりや、

これから二人の前は烈しい試練が待てる。が、つり組んがスクラム

で最後まで逞しく前進しよう。

四月十五日(月)曇 春未し、九時半の列車で登校する。豊田助教

講義あり、それより、待原の下宿に至り、いらく駄づる。牟田兄来る

共に駄づる。就中、深沢との去来森の口口入は愉快より

近頃のヒット版ふん、牟田はむく水ておる。要は、深沢と糾弾と

映画とお茶とおゴラせりのみであらう。二時にホテルを、和井、牟田と三人で

波羊寮に至り、ペンションを、小生、三勝五取、持在戦法は、打止め

の種は何れも入る。僅かに右ポイントより、強引打球の時、決まるのみ

レコーでも及ばず、惨敗する。オルカで合唱して退席する。

四時祭で帰る。白目、輝かに、机に向ふ。

小林田帰る。リールと某鬼(一緒に行つたらしい。毎日々々、が何の意味

も、送る水くゆく。教室でノートを見る。日課あり。それだけなり

四月二十九日(金) 天長節(天皇誕生日)

終日雨ふり、故に、家に閉居る。過す。レコードをかけたリ、

唄つたり、野球を聞いたりして、過す。

婉子も来信あり、先便の返信ふり、「どう虚勢を張るのみや、やっほり

平凡ぶりが愛する存在である事が、私の本心の希ひ、「愛とは己の

全てを以て対者に盡くす事、愛するの故に、愛あがらば、それこそ愛

の強さを、眞の愛といふいと、知るは、いそわ、しかし、私自身、唯(

そのまゝ信じてゐる事。そこに僅と名の生きたるの如く思ふ
おもしろき事。許さず不愉快。

恒子の下に南とは、感傷やある以上、それと徒に詮索しより邪推しより
このいけない。誰よりも此の過程であり、多岐の輝きである。世女を
うせんの心と、打撃やぶらり、それ、あつてあつて、培る日直に
来り、他人が信受する必要もあつて思ふ。二人の心に空を飛ぶ。
少くとも今迄の僕らの二人の歩み、身を引く持てこたへを来し
んが事、あつた。だが、今も僅々、最後の二人と、バーバーフと、思ふし
て、中し、心せし、思ふ。然る。

五月一日(日) 水一 安息日。又方ぶりの快晴に恵まれて、絶好の安息日和
なり。八時起床。カーテンの隙間から朝日が差し込んで、元も言はずぬ
心地よき。部屋を大掃除して気分一新。

それより、兼て約束中の能勢兄の寮の荷物運搬アルバイトに出席す。
伊藤(益)兄と三人で寮よりリヤカーに積んだごとくと郊外の清澄なる
空気を吸ひ、競馬場を迂回して漫歩しながら歩く。向ふは新緑の
北の大自然が到来する。道中、内村・新渡戸両先輩の培れた
北文の伝承統あるものに就て話す。誰か何と云ふも、現在の四五十才
・人にして宗教的感覚を求めた人は、内村先生に、もと、国際問題
に就て考へる人は新渡戸先生に、文の力、小なり、導の力、大なり、
にあるまい。教育者である。然り、いつの時代にも、燦然と輝く地の
中、真理を説き、自ら闘つた両先生程の人間が他の日本人
にのみおらぬか、東文・宗文が官僚・財閥の代表者こそ輩出したか
いつか何ある時代に於ても、これだけの人に多くの感化を与へ、後輩として
奮起せしめ、人があつたらうか。蓋し、両先生を生んだこの北文こそ、
誇り、良いのだ。そして、日多しの人に感化を残し、八月在留のクラーク
先生こそ日本人にこそ恩人となる人にあるまい。近頃とみに北文の学生の品位
が落ちるが、汝らは血の塩を、塩若し、その効力、文の何と云ふも、これに代す
べき、バカルの一句こそ、北文の伝承は、日本人間にこそ、知る人

口少いが、世界の人口に知る人の多い。植物学者、宮部金吾博士も、黙々と
 して、真理探究の学徒として、地の塩を人とし、その人ではあらず、
 波と北文出身者が、消耗とあるが、全口各所の四散と、お少い
 先輩は、地の塩を人とし、黙々と、奉仕とあるを
 自然科学のエンシヤとして、信仰者として、紳士として、品性は、傲り
 なども、現在でも、貫かれてる。この大自然の中に、学が著か、何で
 通り一ぱんの学生としての、研究に終らぬ人々、花曇る石野の野
 そとく、
 何で、
 十の半、
 南下して、
 殺ばい、
 影には、
 の、
 六の、
 早の、

愛する、強く、
 一、
 気が、
 愛を、
 自分、
 良、
 事、
 愛、
 愛、
 愛、

五月二日(月) 朝から雨降り。九時半のバスで登校。市役所前より市電に乗る。仲々快調。アカンヤ並木が芽を出した。とくと赤崎(一) 札幌あり。快通不登校気分にあるのに。解剖学講義 豊田助教 授 猛スピードで進む。

終て、エッセイの復 池田孝原はまじり。日本キリスト者臣科聯盟。社を改倉に開く。北海道地方部会のも達不登校が望ま

い。結局 足心寺が心算を。 兼有 南下。日活館にまじり。ジエキル博士とハイドル。観吸する。人肉に内蔵する虫と善きもの両面。 鎮のヤに切つても切爪

ふいものだ。この二重性を扱ってスチアウソの小説の映画化。 感じをこもる。悪のインネリシムと云ふ事。 怖ろしいことを。あの菓木の。のりには、バカルどつそら。と。現在の目かには、秋(一) 考(一) ハイドルの多い。この社会に。ジエキル博士。一人ひひ(一) の

あつて、最近 人肉の二重性を取扱って斥かぶる。人肉そのものの中を、外の極端な極端の移行を、習見とする。この世紀の悲劇的知性はあるものか。？…… 明日は憲法發布記念日。 夜は 解剖回ニ枚

書して後 楊由兄へ書信。 新憲法發布記念日 天候不順。 新憲法發布記念日 天候不順。 不都合を感じておこ

政治家の話。 旧憲法が 我々口民を支配して来た事も肯 けい。 新憲法が口民を支配して来たことは全面的に肯けない。 口民が 新日本建設と云ふ崇高な理念に一步步邁進してゆく。

これは確かな。 術(一) もやくし。 道徳性に対する。 過度期。 日本口民は 免(一) 角。 はつきりしない。 道徳性に対する。 過度期。 日本口民は 何と云ふも 世界は混沌と云ふ。

である。人生否定、現実より逃避して、如何に生かすや、を考ふる道も
四年間である。我は生命をものに取圍れを生命を考ふる道も、
生かすこと、その事か人生の人かとは肯定も考ふる道も、
これ決して感傷ではない。コロンネアに美化系を自我の世界を
から眺めをエトピアに挿つてのち、無情にそれが砕かれ日に来るが
涙を力に苦しむを誤でもない。益々力を増したるが、随勢はいい
少しとし、斯う信じては、討つて建て、若き日の自我像と
自ら苦しむ校も有り、又、破壊考も、当然である。

只向題のその人の 解課程 (人生肯定のその人の) であるが、若い若
と、当分の間に燃え立せるの不必、世間も知らぬが、此処に、東大不
が考へ出す、教へて、互協し、互正し、最後も、互協し、
自我像の作り直し、多正し、互協し、互正し、
後者の道を辿らう、不正なものを、愛の行為に於て、この現実
を身近に一步の、再建を中つと決心するが、
今の僅か、考ふる事は、そのアトに完全な發揮出来る自信があるが、
それが、今の校も、自己が、如何に、完全に、進められるか、
自己が、つま、い、を、校、も、
匠者と人向の、問題の、最大、事、が、
五月四日(水) 快晴、七時五分着で登校、午前一時帰宅、
床やの中、風名へ入り、ラジヲを聞く、単調な一日あり、
少くも消耗、気味、を、B.C.に、注す、
少くも、春暖に、を、不用心にする、
効率不能

睡眠時間の統一、運動、散歩の徹底を計らう、
静煙も実行し、
多様性、世にも、要日、
五月五日(木) 子供の日、朝から一日中爽やかな五月晴れ、朝日を受けて
起床、文化日本建設の子供の持つ使命は大きい、児童文化向上の
この、混入し、社会に於ても考ふるべきである、
快晴に誘われて
先ず、文化通りを、真一文
が、一面、登山、ハイキング、同行、熊勢兄、

先ず、文化通りを、真一文
が、一面、登山、ハイキング、同行、熊勢兄、

に三角山麓の山小屋に至り、左側の小径を登り、熊谷を介し
 一路、頂上目指す。熊谷がふらふら、径は峻しく急斜面に亘り
 加ふるに春陽暖きて、肌は汗まみれ生む。いよいよ、最後の
 岩場に入る。物凄く岩が、往年の健脚で一気に押し切り
 予想より早く頂上。三角点に達す。見渡せば、石狩の早生
 の春霞の中、模朔とも横はり、藻岩、丸山の麓のう
 整然と並ぶ札幌市街は、実に美しい。蛇行する豊平川
 の此方、繁華街、官庁街、そして北大の広大な構内が、静かに
 かすかに見える。背後には遠く樽前山が、かすかに雪が
 色を帯び、千指の連山が、雄姿を呈す。山々、山々、我がらの
 故郷ありと、感謝す。エッセンスの後、下山を開始。大倉山
 の峰々を辿り、処々に雪が残るおまじ。喝々、痛々、は好適あり
 北海道の山ふらふらの悦味あり。三角山頂より、同行の子供達
 五人連れの藁木、熊谷の尾根の小径を辿り、子供達曰く元氣
 を、雪をぬき、頬張りたり遊ぶ。三つの頂上を越え、
 大倉山に出る。大倉山ジャンプ台で一服す。口体スキー大会ジャンプ大会
 の場所あり。お水より一気に馳下り、程なく、牧場の広いローン
 があり、札幌市街の広い美しい草原を、牛達も日陽
 を受けて思ひ切り、呼吸を吸収とやら、牧場舎裏の
 小高い丘で、寝ころんで、祭歌を唄ふ。水車小屋で、前行の子供達
 は、別荘をと思つたら、このロケーションは、誰にも人がいらないと見えて
 又、女学校三年生の女の子以下七八人の子供達が、親しくお話を
 一绪に集り、丘を降り、上つて、寝たり、お水より、遊ぶ
 摘草の帰り、暖かい春の草の丘に、絶好の休日の子供達
 香い菓子を、日曜学校の讚美歌を合唱する。又、お水より、札幌の子供達
 は、親子で、大いの子供は、教会の日曜学校生徒が、お水に気が合ふ
 絶好の、お水より、く、お水を見え、お水より、お水より、お水より、
 降る文化傳り、お水より、お水より、お水より、お水より、お水より、
 降る文化傳り、お水より、お水より、お水より、お水より、お水より、

眞実である。公導的胎動である。能勢が内村先生の
の無教令（日本民族のキリスト教）に活路を見出し、
五月、彼もすべし、赤岩牧師のコミニエント宣言に懐疑も
はめをうけい。我々、愛と実践に中を歩む。

聖書を用くこと、怖ろしくおそまつ。ガレヤラの勉強●に
引込まれた。いかに、果し、？、要するに、内村、経過
が、希少なものだ。文、吟、の、学校、O・K

五月九日（月）曇後晴 登校の通りすべし、鈴木の下宿先に
ゆく、よもやまの話に花が咲く、思はず時計を見たら十時半
慌て、南講堂に駆け込み、豊田助教授、解剖学講義あり
午石、西洋祭に松井、右金とやえ、心、ホントや。

勝ち、敗れ、その合内にはオルガンに合奏も唄もつ、果し
過す、四時十三分、帰る。何ぞ、知らぬが、もり、（ファイトが
お、て、来、ま、さ、この、儘、は、別、存、死、目、か、敵、を、行、は、す、て
消、殺、日、お、い、基、礎、巨、学、を、み、つ、り、収、得、と、ニ、テ、臨、床、に
勇、敢、に、飛、込、ま、と、さ、る、も、り、を、人、生、あ、ま、さ、ニ、十、有、余、年、

男、見、一、度、巨、学、修、業、の、志、し、の、ら、に、は、刻、苦、勉、励、断、つ、て
初、志、を、貫、き、神、の、愛、を、使、命、と、果、え、ん、哉、!!
ファイトあり、任事、の、ファイト、を、叫、び、起、し、基、礎、巨、学、の、
難、問、を、突、破、し、以、て、著、名、の、成、果、を、納、め、す、昨、日、の、

過去に於て、少しも、勉強、の、修、得、法、に、困、り、の、自、分、と、し、も
経、験、を、積、ん、で、来、る、も、り、を、世、理、の、つ、め、込、み、事、の、非、を、熟、知
し、る、も、り、を、自、知、り、し、る、も、り、を、法、あり、又、あ、ま、さ、と、覚、え、て
中、事、は、ま、さ、く、理、解、の、訓、練、を、し、確、定、に、お、い、と、と、扣、ん、で、ゆ、

べし、快、通、お、し、い、かん、て、過、す、こ、の、二、月、断、れ、と、思、込、ら、
環、境、を、い、か、し、ゆ、り、お、も、結、局、自、己、を、か、ん、す、何、れ、の、
つ、も、お、い、要、は、断、行、あり、地、を、断、行、あり
永、遠、軍、艦、の、確、定、を、知、学、活、の、ま、ま、

五月十四日(土)曇々夕刻より雨となる。午前中、児玉教授(中樞神経)天野助教(消化器の生理)講義あり。それより一時早業で帰宅。安孫子氏宅に於ける。翌日以日曜学校教師会に出席する。

三好教授教師会出席する。要は校舎修繕も出費も事あり。著る実践よりあり。幾多の困難あり。神の愛を信じて。黙歩むに然る。自由の天地あり。結局、旧北二條校舎の指導

と脱して、北池校に直居とあり。各校会員より向う心を授けられし。超教会にて、神の子と平和祈りの元に共に歩むこと。一見、無理な企てか如何なる結果にありか知らぬが、躊躇

を有る場合に非ず、一刻一瞬、実践するをと思ふ。僕は又、中野科(殆ど女学生)の受持とあり。約三〇名と

擔任するに重し。南校五月十一日と決定し、種々協議の上、五月十五日(日)快晴に恵まれて、排曲喜連寺中百三十七期委員会

鈴木委員長以下十一名出席あり。盛合を極む。この日、入札以来、一滴も口せざる小生も、遂に意を込めて

杯を交して旧交を新む。又、湧然と新らしいをフイテテングス。ソリト、湧き起り、文に黙り、且唄ふ。

登歌のロウカミカ、合唱を交して、櫻花の下蓬、和気横溢す。思ふに在寮委員時代の生活三年、吾々の人生に於て

一ポイントとして、永久に忘れざるものあり。今三年、あの渾身の登歌を淡き持て、唄ひ傳ふるも、その永遠を、純き魂に

憧れるものに何の憂れかあろう。旧制学校の重んずる存在意義は、美を経過し、者多の知るをわき、還るを、魂の故郷ニテ、喜連寺のあり、その三年の生活や、得べくして

得るのさかり。真理の光日、以後の人生の、

旅路に 瀟々流々の中のみだが、吾々の生活こそ、最も
それと 迎接しをるゝある。

噫、今（一） 歎けど、おに夢の如く、若しは、三年は、永遠に
還らぬ。時代の推移と共に、新学判とて、その安は消滅し
魂は消滅せず。あの魂の故郷に灯を、又遠く、灯は
幾多、先人の血と混りて打建く。真善美、理想の金子塔
の照映である。そこに、明治廿年以來の伝統は輝き
そこに、若王血潮の溢る、息吹を、崩れ立する。

永遠に、叫ぶ、三年の生活、最も、滞り、了らざるを得
こと、限り、つた、ある。それ、又、何日か、この生活、
必ず、復活し、承る、ある。祈り、合はう。

その生活、了らば、大学に進んだものは、全口民の%に、極
僅少、一%位、ある。それ、正の、持、階級（学生
が、学生自身、又、そのス、カ、ラー、は、新学判、に、
模、平均、者、が、計、る、こと、も、天、て、は、あ、る、変、
変、り、大、小、の、は、吾、ら、に、も、定、に、悲、し、い、こ、と、
この時代の、変遷、の中、に、生、き、享、け、この、持、不、
こと、は、それ、が、の、解決、出来、ない、も、あ、る、と、信、望、の、
共、に、會、う、九、時、彼、の、啼、哭、を、心、を、く、し、り、
大、の、解、散、於、勢、と、共、に、帰、り、心、を、く、し、り、
共、に、會、う、九、時、彼、の、啼、哭、を、心、を、く、し、り、

五月二日（金）曇。 書、か、と、し、氣、遣、う、す、斯、く、お、り、今、日、に
至、る、漸、く、授、業、。倦、怠、を、資、え、は、い、な、す、連、日、学、名、の、ノ、ト
に、お、退、屈、加、ふる、に、本、林、田、の、下、宿、内、題、を、し、何、事、も、若、き、日
の、お、水、事、の、口、知、り、つ、つ、狭、少、の、頭、腦、に、は、吸、収、す、事、
い、と、困、難、に、し、お、れ、ニ、ホ、と、考、つ、つ、今、日、に、至、り、若、き、日、に、は
多、分、に、リ、ズ、い、ふ、生、活、が、あ、る、と、も、目、今、日、身、の、レ、ン、フ、マ、
に、オ、ラ、ン、リ、ッ、ウ、が、盛、衰、を、張、り、は、悲、し、い、け、れ、

昨日より週に入るのぞ、余す処一ヶ月半で夏季休暇ぶり
フランスとして自ら果しむも、果して実行出来るや否や。

母より音信呈す。母の日の便りの返信あり

何れもこのうらあことは元のかげず、勉強せよと書かされてあり。

夢多う、無種の後、豈も罪深き所業木の影をザンヤミ。

五月二十二日(日)才四守息日、花曇りの一日、時々、陽光出づ

七时起、日曜学校南校式、試験前ロンドン開催

中等科計二十七名擔任す。男三名、女二十四名(琴似中女子

十四名、北星学園中等部六名、殊女学園中等部一名、静修

高女中等部二名、北星学園高女子部二名、静修女子高校一名

高小卒一名)あり。最初を、パリサイ人即ヒホクリテ、

就て討す。微力にて如何程つとまるか、疑問あり

彼らの自由なる信仰を伸ばしてやりまわ、それには決して

独善に走らず、彼らに從つて来るおりのものと備へたり

北星学園、前途は困難にこそ、希望更に大あり

午名口、久方ぶり、馬場牧場、表山、訪ル、ロンドンの

木陰で讀書す、快適あり、春の日は有音義使用

せねばならぬ、それより、円山グラウンドまで、散歩とG.I.の

野球を見物す。チームワークが不備だ、スポーツは只技術

のみに追究て口をぬくと痛感す。春の午名をすつたり

衆人でしよう。新緑に映える、札幌郊外の快適さ

味も、全く素晴らしい。内地の春とは一風違ふ

美しきがある、円山では、葉櫻の下で、未だ飲め合はする人

かおが、彼らに如何と、この山々の新緑の賞で

ないが、今が一番美しい季節だ、萌中の緑に

盡す、自然の妙と歎賞す。前立立つ若草、若芽

も、激しく息吹の音、到底、自ら狭い胸に吸収

出来ない、春の緑が、若草の息吹が...

京大の横田より来信あり、「是限り札幌のあの長い雪の生活より開放あるあり。百花百草一度に咲き乱れる春の歡が春の大地の運ぶ息吹。やはり北海道であつては感ぜぬない。美しい大自然の中に育つるは、あり三年の高校生活はやはり自分の生涯に忘れ難い意義を予て呉れしものと深く感ぜぬない。思ふが兄と母のあり支那湖中が最名でいふあの時行そ良かつと懐く一気持で一杯あり。在るに静まり支那湖にあり。一寸あふれ気分味つないでやうい。

「先日東大緒方教授が講演を中。『医者には患者を物復視とはおろさない』とありしが。仁の道はいそいそと吾々学生の中の旅に大いに櫻をうらむ所ありました。二ルから五に昇り甜百里と甜つとも。向ふ道は又一つあり。お互に強張り手さしとあり。マシキタルと極端に嫌ひなつて彼が二のさそと運つたは。相方札幌の風物詩や判執しやうい。追記に「僕はセシキタルとではありませんが。やはり兄の前におもこの種が氣持のちあひあひとある御理解下さい」とあり。

横田去る!! ざんも。この札幌より。好漫横田は去る。二泉。京都産。快人横田の離れは寂しい。

五月二十三日(月) 朝 鈴木の下位(可)つて。一時まじりてく。耽る。彼流の緩漫な生を方を。それなり。札幌講師の筋学(下段)講義あり。帰途。小森と五番館で喫茶して。バスで帰る。昨日。生徒に女学生よりさし。さすに對する批判に就て。彼に討つた。要する。下はまの若いのゆから分別が足りぬいがある。彼とより良の処も多のゆから。決して悲觀する事はない。生徒の人格を尊重し。果しいさるも卒業生。さすやあそびもある。一応。南へかかるといふ。南へかかるといふ。南へかかるといふ。南へかかるといふ。

五月二十五日

意!! 悲しきこの想は、人として強くふれ!! 生さよ!!
と云ふ事は、この世にこの世に社会を認め、ニプラスニは
四では無いと云ふ事を肯定せよと云ふ事なのか

死にて超越し、惜々しき真直に生さすゆゆのものか?
みおけに月を背定し、現実には大なる眼を閉じ、背をまき
みおけに、まをみおけに、この世にみおけを下ゆよと云ふか
生さす事、口をみおけにみおけ、みおけ、みおけ、みおけ、
如何にして世に在るや? 今、世、何をしてはかき事か?
所詮、ワニテストは生さすかぬか?

神よ!! 希はは、この崩れんとし、最後の新りと貴方に捧げ。
僕も、も一度、とてふし給へ、神よ!! 此れ以上、僕も苦め。
ことは、残照、とてふし給へ、お願ひです!!

神よ!! この世の中、貴方の御旨に、誰れも貴方の敵の
ヤツ、困り、何故、僕も、投下、下らふか、お願ひです!!
お願ひです、神よ!! 貴方の、選り、力でもう、一すび、お願ひです!!
すあ、この世、生さす、困り、下さい、お願ひです!!

今日から、十石の、ライ、月、水、雨、日、十名、松、迎、講師、の、筋、学
の、講、義、に、お、依、り、と、生、活、を、送、り、マ、イ、の、内、に、皆、無、と、お、
見、玉、叙、授、目、し、我、が、実、習、の、教、室、の、ス、タ、フ、を、以、て、全、力、を、奉、げ、
講、義、を、す、ま、り、実、習、を、精、力、を、以、て、自、由、な、時、間、に、元、に、
他、の、講、義、に、消、耗、を、事、し、実、習、に、実、込、を、送、り、お、願ひです!!

この、快、通、を、奉、節、に、於、て、講、義、を、実、全、に、送、り、冬、季、に、於、て、は、
反、体、の、腐、敗、が、お、い、から、諸、君、も、冬、季、日、余、り、講、義、に、未、練、
を、お、い、で、お、い、ら、う、反、体、系、統、解、剖、実、習、に、自、由、に、以、内、と、
利、用、を、出、来、る、や、ら、し、ま、い、正、に、お、願ひです!! 親、迎、を!!

待、望、を、お、い、ら、ま、い、お、願ひです!! 天、の、如、き、も、お、願ひです!!
春、の、来、を、お、い、ら、ま、い、何、故、も、お、願ひです!! 此、の、お、願ひです!!
此、の、お、願ひです!! 研、究、会、の、面、白、く、お、願ひです!!

確かに 過去のエピソードを生活が憎み！
頼りの口神多 又愛の偉大なる知水！！
永遠に七の多 真理は キリストの愛あり！！

ニルミ疑ひ迷ふ者よ 躊躇する勿れ！！ 又信を
よも、ミラ愛の滞りあり行け水人あり 祈り、それと定
しな、 力弱く吾らふ水に 真理、先口行進に輝き
才限り、 不動なる歩みの方向が 変らざるはあ
何の何をも 愛を進むべし！！ 愛の、リ、ガイロンを
今迄の人生 一片、 茨の道の如く、セシヤと多ルルも、あつ
こは確か、 水と拒否する 誤りあるが、 今の現実と
直視し、 磨るべき心を 不滅の愛に生る 珠玉
のやま、人向にありき、 前進するのみ！！

五月二十九日(日)中五聖日 昨日続き、晴水渡り快通日

ル時、農業試験所前ロンドンで日曜学校あり
中身科三十数名に對し、イエスと信の概略を語り、今日より
約四回に亘りイエスの生涯を語り、 水も旧約の物語に就
いて語り、 パロヨリ 今日に至る キリスト教の歴史を語り、予定

引續き 教師会 安孫子宛にてあり、 神々の事柄に就き
協議す、 翌年に垣見姉、五年に奈良兄夫婦、夏持と
決定。 六月十二日の内山公園分を、草野理時全の件につき

アラシを築り、 数、分級教材及内考に就き、種々協議あり
又大体、夏季学校は八月初旬と決定す。

水も午餐を、動走にあり、 帰宅す、 例に如く馬場
牧場より内山ランドのコースを散歩す、 正に快通あり

晴水渡り、春の空、 朝之を若草、 小川の流水は清く
午の群生のどけ、 市内に居れば、日晴の千名あはれ、 殊に
ふい、せいじ、 映画の友達と、 終りに、 道はふい

二の快通、 二の健全、 二の味、 二の、 札幌の日の

月一日(水)晴。六月の声を聞え、北海道。最近の季節とふれり、今こそ全精力を盡せしむ、その大目録の美と吸収せりし、南口のロコンテスト堂。その北上價値ある人鳥は鳴き、花は咲き、小川はせうせう。若草は臭い、生けこい生けるより、小川の魚から牧場の牛まで羊も

見て、この六月の快通を記取して。新緑の山はくつろりと映え、エルムの大樹が、若草の上に憩いの影を落とす。この日遂に三浦の内次没して、植物園に幸ひ暫し、ロコンに伏して郷愁に耽る。千石松中え講義待望のブルストのエレルに又も、外科を志す者、断じて謹聴する。赤り、帰途、福田を訪問、お祖母をえもま北中へ、さくらの話に花が咲く、トト植える午休そ夕飯、地足はあり、曲、又よき山話に盡す。最近の所感、首をこして歎く。名残りの惜とじて、八ヶ岳退却する。老る事多し、行かざれば、一日二悪を、まわて遊場は、まらみを會り、寝床へ眼をこす、石、碑体を見、夢の夢、陰より、然るに、我未だ死せず!! 神を愛する者、すおはる御旨に、召来る者の為には、アたまを相働を益とす、我らの知る、ロマノニハ、その日その事を信ぜよ!! 力落さず、歩むべし!!

六月五日(日) 聖霊降下節

日曜日、日常の中に、早や五旬節を迎えぬ。琴似小学校運動会。その、SSS休校あり、静かにこの聖日の朝、祝い、平穩に送る。

昨日、嬖より来信あり、早速返信をしようとする。SSSの事、森田の事、又、夕海舟の事など記す。夏休みは、お氣休かり養成のため、おくと、過りない旨、認む。君は、決して干渉しなす、山所りす事す。

ありとも初水あつと書い 娘子の余(変三三) 又例の秋澤娘
 白合も 変三三(一)の中を 昔方かか今も今も 又例の秋澤娘
 にふりこころいも 夏休みの果しを 決りや
 久方にも終日なまも 花三三(一) 子供達達の
 滑稽の如き態に 羨望したり 秋のさか どのがふ
 春のさか(初夏の一旦?)と送り 明日のう 又笑言
 に違ひ(一週間のノートがやうを 日曜のう どのがふ
 最近の僕(一) 笑の成初るる 尊い日ぞ
 特の子供達の無心のプレイを見てやうと 期まで 清水果て
 を目合が悲しくも 真実笑を やんすと 盡く(一)の
 プレイは涙のう(一) ④ 今日(二)の日のための両親の
 心づきの重話を握ゆを群、そとく あり(世話わ(一)生)
 の無松指の如く 親父がわいり鉛巻で 飛上り(心振るる
 を身をつし 今日(一)の心の安らぎを覚える。スゴーカー
 が遺失物や拾得物の水く 解決しやうと 羽送しやう
 が、この童心の美しいプレイを見て、この平身不器用氣
 に浸るる人達か如何に、柔和な心 状態にやうかか
 分子、この子供達のやうな 純な心が、キリストの
 最も愛せらるる人の心なるか。 然るが(一) 如何なる
 困難の嵐が吹かんとも、この子供達か、このまゝ 強く成長
 して 欲し(一)のぞし 帰途 諏訪にあり、彼の下宿
 以中を、新世界のう 甫そ帰る 又方おりあう
 ⑤ 謝り、悔ふ(一) 一日ふりし事を 感謝する
 ⑥ 月文日(月) 曇 昨夜能勢来り泊る 今朝帰る
 本日 札幌 豊田 松野各先生 講義あり 終つて三時半
 あり 解剖室で Knorrchen 実習あり 当分 見え込み
 命を以て進退谷を 考ふ余地にふり 東大、京大
 国立大学設置法 教員免許法を廻り 吾等が学生運動

せしスト、主導者なき、得ず処分内題案。刻々報道
 亦く管内掲示板にも、報告が付来するが、北大管内の
 動向に至るも、平穩で、先土曜日、医学部自治会の如き
 も僅かの四名、出席者ありし流令と云、始末で、全く学生運動
 の北風にはやの激なり、悪く意味に於ける、日和見を裁
 悪気力、良き意味に於ける、深刻に自己、もし現物
 批判、学内と学生政治は運動の別々々方、ある
 少くも、最も教育を愛する者、学生は、無分相
 行動の許さぬ、いり、一部学生は悲憤、……
 何処に風らし、何れも、敗戦より古鐘下の
 学生は、多き、現実の認識と、教育の崩壊
 一部フアンシの勢力、台頭と、京二面は、ぶつ、東大の
 学生は、フアンシグスリット、謂う、様子、
 H日、えん、事より、学内を、く、H日、自分を受
 い、議合に、つ、警官と争い、死七、人肉、英雄
 に、讃美、は、フアンシ、
 N日、百、事、と、これ、誰、今、教育制度
 採、良、受、京、者、い、一、苦、戦、中、の、自、己、の
 受、そ、し、今日、の、目、分、を、も、胸、に、今、を、当、て、友、者、と、か、る、良、い
 は、違、つ、学、内、の、自、由、を、い、い、加、減、に、ま、さ、せ、
 A日、種、動、革、命、を、多、務、り、教育の環境が、合理化
 なるを、今、の、三、知、性、教、養、の、他、に、学、生、が、果、し、と、社会、の
 出、で、文、化、日、本、運、設、の、と、大、水、を、お、題、目、と、打、つ、と、思、ふ、と
 怖、い、又、彼、ら、自、身、が、そ、う、な、り、決、て、平、安、な、ら、ず、
 大、学、が、出、来、ず、と、思、は、れ、る、や、あ、ら、う、要、する、に、限、定、を、敷、割、
 で、我、ら、の、自、己、の、学、生、と、し、心、の、自、由、を、記、歌、と、遅、れ、
 学、内、の、し、の、向、上、に、努、力、を、ま、さ、せ、交、々、の、声、が、
 大、学、と、京、の、協、働、を、促、す、心、を、い、い、

六月十八日(土) 曇後雨 西二の辺 放課後ラテン語の

特別講義があらまき 夏期講習のころに一切おり

今日の又 全口学生自治会連合会のスト指令に対し、級会や
結局一部一党一派の政治運動に連る学連の在り方
又そのストを非合法手段に對しては 活潑な反対意見
が集中し、総評多、おいてスト指令拒否と決定す
又斯の如く 全学連 別日の加盟進行可否に就ては
事が文字に一部意見として スト指令拒否即
全学連脱退の事 自白とすものありき 亦日臣等即
学生大会は持越るしとす 大勢は 全学連脱退に
至るべきに持越るしとす 斯の如きは 臣等即学生自治会連合会
も非ず、学生と系身命を考へ 一党一派に偏つて
アンの気命の一掃と堅意に自己批判してやのやである
又東大・京大事件に對する抗議文に就ては、これ又
彼等の一方的行動に因る、南渉不為とす 抗議文
提出の反対の可決とす 呼定ニ以

又別七の時の汝等泰に於り 全日本キリスト者臣科
聯盟 北海道支部協議会にお出席す

六月十九日(日) 初三聖日 朝から爽快な気分、横溢し

聖日におふは、い、SSの生徒達も元気に集る

今日はおの依り一章を終りぬいす、人格に服従をして
奇蹟を就す許す 終るの、末、七月十日、合堂後工
記念多倍念の報、準備する 先ず、中平科の
人形芝居、そして合唱、決定 早速、人形芝居
心アテ物語、下読みに入る、皆熱心であり、才あり
予期以上の成果を納む 西岸の、旧可毅のり扱ひ
出ておらうい、何れにせよ、握作も、その相方

六月二日(日) 朝の中は晴のつゞき、序々に晴る

吉野は全く未だ晴く、初夏の廿日陽がまばゆい
今日は学会のその全課目休講と決めて、一日中のんびり
過す。明日の夕方のアウトのその、若くも茶、只喰ひ、寝る。

午前中、机に向ひ、下半期のプランを劃て、流る、三ツノ語と
嘯り、若くは、琴寒川上流を道違る、孤りて川畔の
小径を辿る、子供達の釣をヒリ、水遊びをヒリ。

切り断る、狭谷を清流が走る、緑の断崖が、青空をくつきり
映えて、美しいばかりを、草奈には、少くも強い位の初夏の日は
かぶつて、はなかり、川畔の、川原の細い流を石伝に渡ると

肌には汗がにじみ出る位である、とる川原の草奈をゲータ
詩集をむもとき、且寝る、全く身心共に、静か不
午名を送り、このつらさを好適な環境に感謝する。

僅か十五分位で、三ふ、未だ晴く、知があるとは知らなかつた
札幌郊外には一寸歩けば、定に未だ晴く、知が残る。

街の雰囲気は、東京に比ぶ、二級三級以下のものが多いが
、郊外の各種各様の良さは、絶対日本一の都会が
石狩平野の初夏の道違り、又、男を止の一頁ふえ

あつらく、幼学の余暇は道違る、一時をとり、詩人
をよむ、ロマンティストをよむ、又、食後、生徒、河崎美子
中島規子来る、絵の事あり、果してや。

又、信仰と人格に就き、私、斯うして
生徒達が慕う事を、是れ、是れ、
其、娘、自分が、自分の不徳を思ふと、申訳ない

この地、真実生徒達と何処までも伸のしやれ、
世、汚水に染まる、神の愛を頼り、健やかに成長する
生徒達であつて欲しい、明日から、授業再開あり

一日一が感謝、送る、此頃を、はな一、
中、

や、その代表、前途の多難に見よ

致令達物がおま、その内務の充実

にかきお、一、持てる腕力と準備とを全う努力

しやう、只、彼、この様事、失職と経験があら

学校と西立を、許る範囲で定まらう。

六月二十七日(月) 暑後時、教会アルバート中三

漸く完成の色濃し、即ち壁塗りも完成してらう(息あり

連りの芋園今日し、結実光る、超教派の教会の会を

この新生せんとして、この勇躍、この感激、この河元

そと、花が香う、青草の力で出来上るとは、

千石止の時、中事科の人形芝居準備が二回下読み

を、皆実、熱心、女を男、そして統制がとれて

や、いさく、お茶を飲ませ、靴つらさ、溢れるやうな

真剣味がちれくと迫る、体験、肩抱直と語り

は、よ、ワカツロは話せぬ、気配が邪魔周遊記

ふりまら、女学生の目まぐるがる、誕生が近い

彼せらふ、必ず出来まらう、出来の直ちない

その事に就き、いろいろ話し合え、大丈夫の確信が

ある、勉強奉仕、実践を通じ、自主的アルバ

にお出来、神様はまこと、お夜はあつた、達ちない

帰途、河崎へ、石路を拜借と、銭湯のつら

九月五日、帰、一念を相あり、ガワトナリ

六月二十八日(火) 晴、連日の苦闘の色漸く濃くして

授業中し消粒甚し、安田教授の警告も驚かすとして

全く、夏のめり、日おしに南流してしまふ、帰途後

西山千方面、道違、笑に、喜ぶ、夕陽あり

アルバト、ライオン、一人間、心、表には現れて、深い理想

主義が、泉の、や、地下水の如し、湧き溢れる、言葉、の光が

○全てが狂乱絶漕の中にあつた。その中に絶えが自己を
見つめて来もつてもりではあつたが。とも来は。航路をあやまつて
岩津に乗りあがらなかつた。

七月一日。四朗花鳥の報に急遽帰省す。

〃三日。夜七時帰省す。すまに意識なし。

〃十四日。子高六時ニッテ分。昇天す。人事の凡てを盡くす。

〃〃〃。神四朗と入粟ふりす。

〃二十四日。原町田牧舎より告別式執行す。後、南村の
墳墓の地に埋骨。

八月十二日。御藏に遊覧。奥多摩の清澄寺を元
と福咲寺を同時。過り一月の早瀬の尉す。

〃十九日。御藏より帰宅。

〃二十一日。煥子と婚約式を奉ぐ。

〃三十九日。内外共に出發しと事。認め合ひぬらぬ。

〃三〇日。帰省す。

九月一日。授業開始。清新の気分でスタートす。

〃四日。下宿先の変更。官の金子文更へ移転す。

暖い家庭的な雰囲気の中に飛込む。了謝。

〃二十七日。匠化学子試験を受く。通過す。

 帰省して以来。琴似教令及日曜学校の目覚
まりの奮励がりに感謝す。同時に七層の奉仕と
勉す。

〃二ヶ月。何事も過去とす。彼方へ押し流してしまふ
には余りに事。記録しあつたらう。

忘却の彼方。書き事々へ失つてしまふ。二ヶ月と

又解小の事は必す。い。

十月八日(日) 中ニ聖日

秋時ルの日曜日

子供達と

礼拜と捧いで、中等科分級に於ては、マルコ伝五章二の節以後

を講ず。次回は、イマノ、カウラヤ伝道に於ては、教々の奇蹟につて

話をしにす。イマノ、奇蹟と現代人の個性を以ては、そのまゝ事實

とを、要請認りしは出来ぬ、生徒達が、この奇蹟と曲解を

言つたり、或程度、懷疑し、モロ、問題に

礼拜は、可合安孫子長老、説教村岸教師、

千石の久方おりて、馬場牧場へゆく、カラリと晴れた秋空を、

郊外の田園風景の中をゆく、札幌ふるでは、満喫です

同行、河崎三姉妹、又、津妹、堀川妹、計六人おり、

讚美歌、コーラスと、モロ、採転んが、快通ふ、千名である

皆、日曜学校の生徒である、実によい子供達である

河崎先生の末娘、佳代子先生、お風呂でも一浴は、

お風呂の中を流して、お風呂、細い川に、お風呂、お風呂、

週日の、辰休と一緒に、生活の中にも、一日の本日は、果し、

有意義に、過るべきである、実習室の開放を、お風呂、

通ふ一日、現在の、僕達、お風呂、お風呂、お風呂、

一夜は、医化学の、お風呂、お風呂、お風呂、

去らば最尊の存在のこの渦巻の中は激しく身肉を
 日長歎息する。若し鬼の命こそあるべし
 空に身を自命の言行よ。汝のその吐息も言葉
 の形行も行動は何と愚かしの事よ。
 有るを伊水、生えぬの汝の爲るをか。限界は身
 と道、遊子にして何とホメんとておるか？……
 二の現実。滑稽の中の眞実とは何ぞも何処にも
 仰向し歩み中、ラ日の頃の姿よ。自嘲はよ
 の滑稽に美を込め込れ。まご、校手お切り
 逆行するをか。愚かしの事よ
 現実主義者こそ此の理想主義者である。
 と叫ぶ先人。道を舟。北肯定しつつも、
 滅入るに心がよ。…… 迷途小羊を追う来て
 是も牧人もふ。…… 恍惚に秋更りより
 正に西山紅一色をえんとす。
 ホルネリンと履具の連続が、斯くも束縛しようとの
 夢には思ひのりき。一日の経過の何と早き事よ
 意。斯く懐く過す事。即ち一日の
 現実。一瞬の現実。に生きゆくことである。は。
 易かごとく生きたるに過すべし。
 是こそ、嚴しき現実の。汝よ。謝らるる。

But seek ye first the kingdom of god, and his
 righteousness; and all these things shall be
 added unto you. Take therefore no thought for
 the morrow: for the morrow shall take thought
 for the thing, of itself. Sufficient unto the day
 is the evil thereof. (St. Matthew chap 7: 33-34)

十月十六日(日) 世界SS日 午前中 例、如し

特ニこの日。中学科一年。教授要目は イエス、奇蹟ニラズ
合理的の肯定を話す。 当(二十年前) 信者多の信仰
と認る事。即ちイエスの奇蹟と認る下ニ至ル。

何分 中一一年生() 話した。骨の折れ。 辨証法的
に別引() 話果し。分る。如何か。

午後は 野外礼拝と 青年会と合同で 奉奠ニ川畔にて
行ふ。 参加者 SS七名。 青年会ニ名。 計九名にて
盛大に 礼拝であった。 三好牧師以下 全教師参加

す。 状も 終端である。 二の日の 野外礼拝は 多少
困気にて 良き 行事であった。 終り 献花居て 上場す。

SS 教務主任と 上見を買って 一ヶ月半 大休
ス。 スに 事務と 運営と 来を やらぬ。 今日 七名の子徒

と 正規の 日曜学校 生徒と 学藉簿に 記載した
同時に 生徒章を 授けられた。 凡そ 意味は 対外的にも

対内的にも 事務の 責任を 感する。 教師会の方にも
の 問題はある。 教果。 報告は 行われて 一志。 平安

の 事。 二の目。 Xマス 持越 せる 確心 あり。
何もしやう。 三アルバートは 心痛。 教会との 連絡 なく

教師会。 運営が 難点がある。 一氣に Xマス 持て 行な
出。 一。 来の中にも 無理が 伴う。 破端 来る。 自合の

精力。 体力にも 相談 せねば ならぬ。
十月十八日(火) 三。 ヤ。 全く マンネリズ。 又 靴を 持て

学校へ 行くのみ。 真。 近。 秋は 深更 あり。 机に 向ても 勉強 する 気力 あり

恐ろしい マンネリズ ム。 如何ともし 難し。 読書 する 気力 あり。 愛。 一体 全体。 今日 如何
に 事 あり。 何事 も 忘れ ず。 何事 も マンネリズ あり。

十一月二十八日(月)時 怖ろしく月日の経つのが早い。瞬く間に十二月
が又また。帰省だ。学校も余す処三週間あり。

解剖実習もあと一休で休暇との事。月廻しかつて十月十一日
であった。加ふるに日曜学校の方も人間的な障害をこころあは
れ軌道に乗ってやうに信じてたい。教会の方も円滑なる歩みを續けて
やう。只いけぬのは自分の頭だ。益々ホヤケく来る。

最後の(7月)猛烈に遊張りをい。
S.Sの生徒の膨張は急激あり。遂に二百人に達した。
このまゝでいつてやうに教授困難なる。二部制の實施を待つた
何処まで。神助にや仲間の分らぬが。寂しい悲鳴をよぶた
昨日。伊東又帰郷する。札幌を引上げて帰坂するのでも
彼の彼ら、生々方には何も言ふまい。黙して送らう。

(伊東送別コンパが二日續き、腹工合が少し変だ)
僕は自分よりの頑固な信仰信條を以てする。それによつて教会
を認め、改革せんと決心してやう。決て今現代の教会がキリストの
真如に給ふ教会とは思はない。否、決てよ。嘉し給はない。
僕はその水に信じてやう。そして生徒に教えてやう。傲慢に教えてやう。
僕は今も、その水に信じて、或時は討論し、友論し、或時は実践として来を。
誰か何と云はう。僕は僕一人では歩んで来た。現代教会の改革
を信念として斗う末三つあり。教会外からの時、へもあつて、教会内
での時もある。現在は、教会内でのやうにして、神を曲が得ない。神
神、我と共に在り、その水に信じてやう。神若し、我の味方ならば
誰か、我に敵せや。例へて、教会の在り方、流を中、捕我とわらう
人向か何と云はう。神が教会をてり給ふも、邪道は否あり
断りて、節と屈とはあはない。己の信念を守り、神、嘉し給ふ
教会に、はする。僕、斯の持て、信念を持て、この琴以て、
に連る事、誰が知らうか。何ぞ、然し、何ぞ、幸やや
僕の、この在り方、信念、ほのかに感し、生徒の中から信者に

